

# 誰も知らぬ

太宰治

青空文庫



誰も知つてはいないのですが、——と四十一歳の安井夫人は少し笑つて物語る。——可笑おかしなことがございました。私が二十三歳の春のことでありますから、もう、かれこれ二十年も昔の話でございます。大震災のちよつと前のことでございました。あの頃も、今も、牛込のこの辺は、あまり変つて居りませぬ。おもて通りが少し広くなつて、私の家の庭も半分ほど削り取られて道路にされてしましました。池があつたのですが、それも潰されてしまつて、変つたと言えば、まあそれくらいのもので、今でも、やはり二階の縁側からは、真まつすぐ直に富士が見えますし、兵隊さんの喇叭ら叭つぱも朝夕聞えてまいります。父が長崎の県知事をしていたときに、

招かれて、こちらの区長に就任したのでございますが、それは、ちようど私が十二の夏のこととて、母も、その頃は存命中であります。父は、東京の、この牛込の生れで、祖父は陸中盛岡の人であります。祖父は、若いときに一人でふらりと東京に出て来て半分政治家、半分商人のような何だか危かしいことをやって、まあ、紳商とでもいうのでしょうか、それでも、どうやら成功して、中年で牛込のこの屋敷を買い入れ、落ちつくことが出来たようです。嘘か、ほんとか、わかりませんけれど、ずっと以前、東京駅で御災厄にお遭いなされた原敬とは同郷で、しかも祖父のほうが年輩からいつても、また政治の経歴からいつても、はるかに先輩だったので、祖父は何かと原敬に指図さしづをすることができる、原敬のほ

うでも、毎年お正月には、大臣になられてからでさえ、牛込のこの家に年始の挨拶に立ち寄られたものだそうですが、これは、あまりあってになりません。なぜって、祖父が私に、そう言つて教えたのは、私が、十二の時、父母と一緒にはじめて東京の、この家に帰り、祖父は、それまで一人牛込に残つて暮していたのですが、もう、八十すぎの汚いおじいさんになつていて、私はまた、それまでお役人の父が浦和、神戸、和歌山、長崎と任地を転々と渡り歩いているのについて歩いて、生れたところも浦和の官舎ですし、東京の家へ遊びに来たことも、ほんの数えるほどしかありませんでしたから、祖父には馴染なじみが薄くて、十二のとき、この家にはじめて落ちつき、祖父と一緒に暮すようになつてからも、なんだか

他人の such a feeling がして、きたならしく、それに祖父の言葉には、  
とても強い東北訛なまりが在りましたので何をおつしやつて いるのか、  
よくわからず、いよいよ親しみが減殺されてしまうのでした。私  
が祖父に、ちつともなつかないので、祖父は手を換え品を替え私  
の機嫌をとつたもので、れいの原敬の話も、夏の夜お庭の涼み台  
に大あぐらをかいて坐つて、こんな工合に肘ひじを張つて、団扇うちわを使  
いながら私に聞かせて下さつたのですが、私は、すぐに退屈して、  
わざと大袈裟おほさまにあくびをしたら、祖父は、ちらとそれを横目で見  
て、急に語調を変えて、原敬は面白くなし、よし、それでは牛込  
七不思議、昔な、などと声をひそめて語り出すのでした。なんだ  
か、するい感じのおじいさんでした。原敬の話だつて、あてにな

らないと思います。あとで父にそのことを聞いたら、父は、ほろにがく笑つて、いちどくらいは、この家へ来たかも知れません、おじいさんは嘘を言いません、と優しく教えて私の頭を撫でて下さいました。祖父は、私が十六のときになくなりました。好きでないおじいさんだつたのですが、でも、私はお葬式の日には、ずいぶん泣きました。お葬式があんまり華麗すぎたので、それで、興奮して泣いちゃつたのかも知れません。お葬式の翌<sup>あく</sup>る日、学校へ出たら、先生がたも、みんな私にお悔みを言つて下さつて、私はその都度、泣きました。お友達からも、意外のほどに同情され、私はおどおどしてしまいました。市ヶ谷の女学校に徒步で通つていたのですが、あのころは、私は小さい女王のようで、ぶんに過

ぎるほどに仕合せでございました。父が四十で浦和の学務部長をしていたときに私が生れて、あとにも先にも、子供といえば私ひとりだつたので、父にも母にも、また周囲の者たちにも、ずいぶん大事にされました。自分では、気の弱い淋しがりの不憫の子のつもりでいたのですが、いま考えてみると、やはり、わがままの高慢な子であつたようでございます。市ヶ谷の女学校へはいつてすぐ、芹川さんというお友達が出来ましたけれど、その当時はそれでも、芹川さんに優しく叮嚀につき合っているつもりでしたのですが、これも、いま考えてみると、やつぱり私は、ひどく思いあがつて、めんどうくさいけれど親切にしてあげるというような態度も、はたから見ると在つたかも知れません。芹川さんも

また、ずいぶん素直に、私の言うこと全部を支持して下さるので、勢い主人と家来みたいな形になつてしまふのでした。芹川さんの家は、私の家の、すぐ向いで、ご存じでしようかしら、華月堂というお菓子屋がございましたでしよう、ええ、いまでも昔のまま繁昌して居ります、いざよいもなか最中あんといつて、栗のはいつた餡の最中を、昔から自慢にいたして売つて居ります。いまはもう、代がかわつて芹川さんのお兄さんが、当主となつて朝から晩まで一生懸命に働いて居ります。おかみさんも、仲々の働き者らしく、いつも帳場に坐つて電話の注文うかがを伺つては、てきぱき小僧さんたちに用事を言つけて居ります。私とお友達だつた芹川さんは、女学校を出て三年目に、もういい人を見つけてお嫁に行つてしまふ

いました。いまは何でも朝鮮の京城とやらに居られるようでござります。もう、二十年ちかくも逢いません。旦那さまは、三田の義塾を出た綺麗きれいなおかたとして、いま朝鮮の京城で、なんとかいう可成り大きな新聞社を經營して居られるとかいう話でございます。芹川さんと私とは、女学校を出てからも、交際をつづけて居りましたが、交際といつても、私のほうから芹川さんのお家へ遊びに行つたことは一度も無く、いつも芹川さんのほうから私を訪ねて来て、話題は、たいてい小説のことですございました。芹川さんは、学校に居た頃から漱そうせき石や蘆花ろかのものを愛読していて、作文なども仲々大人びてお上手でしたが、私は、その方面は、さっぱりだめございました。ちつとも興味を持てなかつたのです。

それでも、学校を出てからは、芹川さんのちよいちよい持つて来て下さる小説本を、退屈まぎれに借りて読んでいるうちに、少しは小説の面白さも、わかつて来たようでした。けれども、私の面白いと思つた本は、芹川さんは余り、いいとはおつしやらず、芹川さんのいいとおつしやる本は、私には、意味がよくわかりませんでした。私は鷗外おうがいの歴史小説が好きでしたけれど、芹川さんは、私を古くさいと言つて笑つて、鷗外よりは有島武郎のほうが、ずっと深刻だと私に教えて、そのおかたの本を、二三冊持つて来て下さいましたけれど、私が読んでも、ちつともわかりませんでした。いま読むと、またちがつた感じを受けるかも知れませんけれども、どうもあの有島というかたのは、どうでもいいような、

議論ばかり多くて、私には面白くございませんでした。私は、きっと俗人なのでございましょう。そのころの新進作家には、武者小路とか、志賀とか、それから谷崎潤一郎、菊池寛、芥川とか、たくさんございましたが、私は、その中では志賀直哉と菊池寛の短篇小説が好きで、そのことでもまた芹川さんに、思想が貧弱だとか何とか言われて笑われましたけれど、私には余り理窟の多い作品は、ダメでございました。芹川さんは、おいでになる度毎に何か新刊の雑誌やら、小説集やらを持つて来られて、いろいろと私に小説の筋書や、また作家たちの噂話を聞かせて下さるのですが、どうも余り熱中しているので、可笑しいと思つて居りましたところが、或る日どうとう芹川さんは、その熱中の原因らしいも

のを私に発見されてしまいました。女の友達というものは、ちょっとでも親しくなると、すぐにアルバムを見せ合うものでござりますが、いつか、芹川さんは大きな写真帖を持つて来て、私に見せて下さいましたけれど、私は芹川さんの、うるさいほど叮嚀な説明を、いい加減に合槌打つて拝聴しながら一枚一枚見ていくて、そのうちに、とても綺麗な学生さんが、薔薇ばらの花園の背景の前に、本を持つて立っている写真がありましたので、私はおや綺麗なおかたねえ、と思わず言つてしまつて、なぜだか顔が熱くなりました。すると芹川さんは、いきなり、いやつと言つて私からアルバムをひつたくつてしまつたので、私には、すぐははあと、気がつきました。いいの、もう拝見してしまつたから、と私が落ちつい

て言うと、芹川さんは急に嬉しそうに、にこにこ笑い出して、わかつたの？ 油断ならないわね、ほんとう？ 見て、すぐわかつたの？ もうね、女学校時代からなのよ、ご存じだつたのね、などとひとりで口早に言い始めて、私が何も知つてやしないのに、洗いざらい、みんな話して下さいました。ほんとうに、素直な、罪の無いおかたでした。その写真の綺麗な学生さんは芹川さんと、何とかいう投書雑誌の愛読者通信欄とでも申しましようか、そんなところがあるでしょう？ その通信欄で言葉を交し、謂わば、まあ共鳴し合つたというのでしょうか、俗人の私にはわかりませんけれど、そんなことから、次第に直接に文通するようになり、女学校を卒業してからは、急速に芹川さんの気持もすすんで、何

だか、ふたりで、きめてしまつたのだそうです。先方は、横浜の船会社の御次男だと、慶応の秀才で、末は立派な作家になるでしょうとか、いろいろ芹川さんから教えていただきましたけれど、私は、ひどく恐しい事みたいで、また、きたならしいような気さえ致しました。一方、芹川さんをねたましくて、胸が濁つてときめき致しましたが、努めて顔にあらわさず、いいお話ね、芹川さんしつかりおやりなさい、と申しましたら、芹川さんは敏感にむつとふくれて、あなたは意地悪ね、胸に短剣を秘めていらつしやる、いつもあなたは、あたしを冷く軽蔑していらっしゃる、ダメナね、あなたは、といつになく強く私を攻めますので私も、ごめんなさい、軽蔑なんかしてやしないわ、冷く見えるのは私の

損な性 しょうぶん 分ね、いつでも人から誤解されるの、私ほんとうは、あなたたちの事なんだか恐しいの、相手のおかたが、あんまり綺麗すぎるわ、あなたを、うらやんでいるのかも知れないのね、と思つてていることをそのまま申し述べましたら、芹川さんも晴れ晴れと御機嫌を直して、そこなのよ、あたし、家の兄さんにだけは、このことを打ち明けてあるのだけれど、兄さんも、やつぱりあなたと同じようなことを言つて、絶対反対なの、もつと地じみちな、あたりまえの結婚をしろつて言うのよ、もつとも兄さんは徹底した現実家だから、そう言うのも無理はないけれど、でも、あたし兄さんの反対なんか気にしていないので、来年の春、あの人が学校を卒業したら、あたしたちだけでちやんときめてしまうの、と可

愛く両肩を張つて意氣込んでいました。私は無理に微笑み、ただ首肯いて聞いていました。あの人の無邪気さが、とても美しく、うらやましく思われ、私の古くさい俗な氣質が、たまらなく醜いものに思われました。そんな打ち明け話があつてから、芹川さんと私の間は、以前ほど、しつくり行かなくなつて、女の子つて変なものですね、誰か間に男の人がひとりはいると、それまでどんなに親しくつき合つていたつても、颯さつと態度が鹿爪らしくなつて、まるで、よそよそしくなつてしまふものです。まさか私たちの間は、そんなにひどく変つたわけではございませんけれど、でも、お互に遠慮が出て、御挨拶まで叮嚀になり、口数も少なくなりましたし、よろずに大人びてまいりました。どちらからも、

あの写真の一件に就いて話するのを避けるようになりますて、そのうちに年も暮れ、私も芹川さんも、二十三歳の春を迎えて、ちょうど、そのとしの三月末のことですございます。夜の十時頃、私が母と二人でお部屋にいて、一緒に父のセルを縫つて居りましたら、女中がそつと障子を開け、私を手招き致します。あたし？と眼で尋ねると、女中は真剣そうに小さく二三度うなずきます。

なんだい？と母が眼鏡を額のほうへ押し上げて女中に訊ねましたら、女中は、軽く咳をして、あの、芹川さまのお兄様が、お嬢さんに鳥渡ちよつと、と言いにくそうに言つて、また二つ三つ咳をいたしました。私は、すぐ立つて廊下に出ました。もう、わかつてしまつたような気がしていたのです。芹川さんが、何か問題を起し

たのにちがいない、きつとそうだ、ときめてしまつて、応接間に  
行こうとすると、女中は、いいえお勝手のほうでござります、と  
低い声で言つて、いかにも一大事で緊張している者のように、少  
し腰を落して小走りにすツすツと先に立つて急ぎます。ほの暗い  
勝手口に芹川さんの兄さんが、にこにこ笑いながら立つていまし  
た。芹川さんの兄さんは、女学校に通つていたときには、毎朝  
毎夕挨拶を交して、兄さんは、いつでも、お店で、小僧さんたち  
と一緒に、くるくると小まめに立ち働いていました。女学校を出  
てからも、兄さんは、一週間にいちどくらいは、何かと注文のお  
菓子をどだけに、私の家へまいつていまして、私も気易く兄さん、  
兄さんとお呼びしていました。でも、こんなに遅く私の家にまい

りましたことは一度も無いのですし、それに、わざわざ私を、こつそり呼ぶというのは、いよいよ芹川さんのれいの問題が爆発したのにちがいない、とわくわくしてしまって、私のほうから、

「芹川さんは、このごろお見えになりませんのよ。」と何も聞かれぬさきに口走つてしましました。

「お嬢さん、ご存じだつたの？」と兄さんは一瞬けげんな顔をなさいました。

「いいえ。」

「そうですか。あいつ、いなくなつたんです。ばかだなあ、文学なんて、ろくな事がない。お嬢さんも、まえから話だけはご存じなんでしょう？」

「ええ、それは、」声が喉<sup>のど</sup>にひつからまつて困りました。「存じて居ります。」

「逃げて行きました。でも、たいていいどころがわかつているんです。お嬢さんには、あいつ、このごろ、何も言わなかつたんですね?」

「ええ、このごろは私にも、とてもよそよそしくしていました。まあ、どうしたのでしょうか。おあがりになりません? いろいろお伺いしたいのですけれど。」

「は、ありがとう。どうしても居られないのです。これから、すぐあいつを捜しに行かなければなりません。」見ると、兄さんは、ちゃんと背広を着て、トランクを携帯して居ります。

「心あたりがござりますの？」

「ええ、わかつて居ります。あいつら二人をぶん殴つて、それで一緒にさせるのですね。」

兄さんはそう言つて屈託なく笑つて帰りましたけれど、私は勝手口に立つたままぼんやり見送り、それからお部屋へ引返して、母の物問いたげな顔にも気づかぬふりして、静かに坐り、縫いかけの袖そでを二針三針すすめました。また、そつと立つて、廊下へ出て小走りに走り、勝手口に出て下駄をつつかけ、それからは、なりもふりもかまわず走りました。どういう気持であつたのでしよう。私は未だにわかりません。あの兄さんに追いついて、死ぬまで離れまい、と覚悟していたのでした。芹川さんの事件なぞてん

で問題でなかつたのです、ただ、兄さんに、もいちど逢いたい、  
どんなことでもする、兄さんと二人なら、どこへでも行く、私を  
このまま連れていつて逃げて下さい、私をめちゃめちゃにして下  
さいと私ひとりの思いだけが、その夜ばかり、唐突に燃え上つて、  
私は、暗い小路小路を、犬のように黙つて走つて、ときどき躊躇つまづい  
てはよろけ、前を搔かき合せてはまた無言で走りつづけ涙が湧いて  
出て、いま思うと、なんだか地獄の底のような気持でござります。  
市ヶ谷見附の市電の停留場にたどりついたときは、ほとんど呼吸  
ができないくらいに、からだが苦しく眼の先がもやもや暗くて、  
きつとあれは氣を失う一歩手前の状態だつたのでございましよう。  
停留場には人影ひとつ無かつたのでした。たつたいま、電車が通

過した跡の様子でございました。私は最後の一つの念願として、兄さん！ とできるだけの声を絞つて呼んでみました。しんとしています。私は胸に両袖を合せて帰りました。途々、身なりを整えてお家へ戻り、静かにお部屋の障子をあけたら、母は、何かあつたのかい？ といぶかしそうに私の顔を見るので、ええ、芹川さんがいなくなつたんですつて、たいへんねえ、ときりげなく答えて、また縫いものをはじめました。母は、何か私につづけて問いたいふうでしたが、思いかえた様子で、黙つて縫いものをつづけました。それだけの話でござります。芹川さんは、まえにも申し上げましたが、その三田のおかたと芽出度く結婚なされて、いまは朝鮮のほうにいらつしやる様子でございます。私もその翌

年に、いまの主人を迎えるました。芹川さんの兄さんは、そののちお逢いしても、別になんともございません。いまは華月堂の当主として、綺麗な小さいおかみさんをおもらいになつて仲々繁昌して居ります。やつぱり、ずっとつづけて一週間にいちどくらいは、御主人が注文の御菓子をとどけにまいります。別に、かわつたこともございません。私は、あの夜、縫いものをしながら、うとうと眠つて夢を見たのでございましょうか。夢にしては、いやにはつきりしているようでございます。あなたには、おわかりでしょうか。まるで嘘みたいなお話でござります。でも、之は秘密にして置いていただきましょう。娘があなた、もう女学校三年になるのでございますもの。



# 青空文庫情報

底本：「太宰治全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月刊行

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999年12月20日公開

2005年10月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 誰も知らぬ

## 太宰治

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>